



新害虫ビワキジラミの防除対策の確立

ビワキジラミの防除体系技術の開発

香川県農業試験場府中果樹研究所 ^き生 ^{さき}咲 ^{がん}巖
 香川県農業協同組合 ^{わた}渡 ^{なべ}邊 ^{たけ}丈 ^お夫

はじめに

ビワキジラミ *Cacopsylla biwa* は 2012 年に徳島県で初めて発生が確認され（徳島県病害虫防除所，2012；INOUE et al., 2014），香川県でも 2016 年に確認された（香川県農業試験場病害虫防除所，2016）。本種の防除に使用できる登録農薬としては 2013 年にジノテフラン水溶剤・液剤とトラロメトリン水和剤が登録されたが，徳島県では「袋掛け前に殺虫剤散布を 2 回実施したものの，効果は不十分ですす病が発生した」など，圃場においてこれらの薬剤を従前の方法で寄生樹に散布しても，十分な防除効果が得られない（中西ら，2015）ことが問題となっていた。

そこで，2017 年から国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構生物系特定産業技術研究支援センター・イノベーション創出強化研究推進事業「四国で増やさない！四国から出さない！新害虫ビワキジラミの防除対策の確立」で関係機関とコンソーシアムを立ち上げて本害虫の防除対策の確立を行ってきた。その中で我々は，香川県下のビワ防除の実態を踏まえながら現地試験を行い，香川県ビワ防除暦を改良してビワ産地で実施可能な防除体系を確立したのでそれを紹介する。

I ビワ防除の実態

防除体系を確立することができても，実際に生産者が防除を実施しなければ実効性がない。そこで香川県農協ではまず防除実態を把握することとした。香川県農協に出荷している組合員は，トレーサビリティシステムの一環として防除履歴を提出している。それによると香川県農協出荷者 202 名のうち殺虫剤使用者は約 30% で，そのうち害虫防除を 1 回実施した者が 72%，2 回の者が

23% であった。次に防除の実施時期を見ると病害防除も含めて 3 月を中心とする春防除が最も多く，防除実施者のほとんどが春に実施していた。春に 2 回防除している者もいるが，多くの 2 回防除実施者は 10～11 月に実施していた。

ビワキジラミの防除を適期に実施すべきことは当然であるが，防除の実施率の高い時期に有効な防除を配置するのも重要である。そこで香川県では 3 月を中心とした春の防除と 10～11 月の秋の防除を主軸とした防除体系でビワキジラミを有効に防除できないかを検討することとした。春の防除ではペルメトリン水和剤とアセタミプリド水溶剤の使用頻度が高かったことから，これらに替えてジノテフラン水溶剤を暦採用することとした。また開花期ころの防除ではビワサビダニ剤としてピリダベン水和剤を採用しており，使用頻度も殺虫剤では第 2 位と高かった。本剤はコナジラミ類対策で実績があることから，参画県で有効薬剤の選定を行っている徳島県で早急に効果確認をし，防除体系の確立を実施している香川県では春防除で実施するジノテフラン水溶剤の効果とその適期について検討することとした。

II 防除薬剤の選択

徳島県が行った薬剤感受性検定の結果（中西ら，2015；阿部・中西，2018；兼田ら，2019）をもとに，現地圃場において薬剤の効果を検討した。

春期防除における幼虫に対する効果は，ジノテフラン水溶剤が散布 14 日前まで高い効果を示したのに対してアセタミプリド水溶剤はやや劣り，ピリダベン水和剤は効果が認められなかった（図-1）。

開花期にビワサビダニを対象にピリダベン水和剤を散布したところ，ビワキジラミ成虫に対して効果が認められた（図-2）。夏期にチョウ目害虫対象に配置しているカルタップ水溶剤の成虫密度抑制効果は認められなかった（データ省略）。

Development of Control System Technology for *Cacopsylla biwa*.
 By Gan KISAKI and Takeo WATANABE

（キーワード：ビワキジラミ，防除体系，防除薬剤，防除適期，防除方法）